

2019年 平山郁夫画伯作品集「日本の古都」作品紹介

「私は寺院の塔が好きなんです」と公言していたように、平山郁夫画伯が古都を描いた作品では画題を塔に求めたものが比較的多い。

「黎明薬師寺」(表紙)は、大池(勝間田池)から望んだ景観である。朝まだき、若草山の空が次第に茜色あかねに染まっていく。その光を受けた凜とした薬師寺が描かれている。落款が「平山郁夫」と記されているのは、「北京の日本大使館大使公邸に納められるので、中国の方たちが見る機会も多いことを考慮したため」とは、画伯の弁。

法隆寺は、日本の仏教文化の黎明期に咲いた大輪の花である。金堂にある本尊の釈迦三尊像は、飛鳥時代の仏像として世界的に名高い。世界で最も古い木造建築である法隆寺の象徴は「法隆寺の朝」(1・2月)に描かれている五重塔。聖徳太子と推古天皇の発願によって建てられてから千四百年余。この作品は日本の古代文化の記念碑たる法隆寺への画伯のオマージュであろう。

白川女しらかわめは、かつて北白川界隈で旅人に花を売っていたのだが、次第に京の市中に進出するようになった。彼女たちの売る花は仏壇くげの供花である。「浄花白川女 母娘おやか」(3・4月)に描かれている姿は、今日では花行列などの催事の時にしか見られない。京の仏壇の花守の姿が消えていくのは淋しい限りである。

平山画伯は風景を描く場合、春夏秋冬、午前、午後、その時々々の光の変化による対象物の印象を重視する。南都七大寺の一つで藤原氏の氏寺である興福寺を描いた「緑映猿沢の池 奈良興福寺」(5・6月)は、その画題のとおり、緑の光が強調されている。

祇園祭は八坂神社の祭り。祭りの多い京にあって、単に「祭り」と言えば、祇園祭をさす。この祭りのハイライトは、7月14日頃から始まる宵山に続く山鉦巡行いらかであろう。薨が連なる町家の間を通る山鉦。これぞ京の祭りといった感がする。「祇園祭」(7・8月)を見た人が、ここは京のどのあたりでしょうか、と平山画伯に尋ねておられたが、この作品は取材に基づいた画伯の創作なので、描かれている場所は現実にはない。

「赤蜻蛉あかとんぼ」(9・10月)は、講談社から出版された「絵画館 四季 日本のうた」のために描かれた。日本の童謡、愛唱歌百曲を四季に分類。その挿画を当時の著名日本画家が担当した。平山画伯お気に入りの薬師寺の塔をバックにデフォルメされて描かれている赤蜻蛉が郷愁を誘う。

京都御所は南北朝時代以来、500年にわたり日本の王城であった。御所には高い築地塀に囲まれた方形の土地に殿舎が立ち並ぶ。一步、中へ歩を進めれば、そこは王朝文化の空気が支配する世界である。

「京都御所宜秋門ぎしゅう」(11・12月)は、御所西面の中央の御門。これに対して、紫宸殿ししんでんに面し御所の南中央にある御門が建礼門。ちなみに時代祭の行列は、この御門の前から出発する。静寂な御所の雰囲気は年の瀬にあって、かえってふさわしいのではなかろうか。